Tsukuba Psychological Research
2007, **34**, 91-99

自尊心と被受容感による思春期の適応理解の検討[1)]

― 社会的スキルとの関連から ―

筑波大学大学院人間総合科学研究科　鈴木　真吾

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系　小川　俊樹

Adolescent adjustment due to self-esteem and sense of being accepted : Its relation to social skills

Shingo Suzuki and Toshiki Ogawa (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, 305-8572, Japan*)

There are various aspects to understanding adolescent adjustment styles. We hypothesize that a combination of self-esteem (SE) and the sense of being accepted (SBA) can provide good measurements of adolescent adjustment styles and that adjustment style influences social skills. A total of 528 junior high school students were asked to rate their SE, SBA, social skills, while their class teachers evaluated the social skills of the students. Based on the SE and SBA scores, the participants were divided into five sub-groups reflecting their adjustment styles. These sub-groups were (1) High SE/ High SBA, (2) Low SE/ Low SBA, (3) High SE/Low SBA, (4) Low SE/High SBA, and (5) Mid SE/ Mid SBA. The relationships among the five adjustment styles and between both self-rated and teacher-rated social skills were analyzed. The results are partially consistent with our hypothesis, for they indicate that a combination of SE and SBA can be a useful tool for understanding adolescent adjustment.

Key words: adolescence's adjustment, self-esteem, sense of being accepted

問題と目的

近年，過剰適応や自己中心的という特異な思春期心性を抱える生徒への対応の難しさが教育現場で問題となっている。過剰適応と自己中心的な心性を理解するひとつの重要な観点として，内外適応のアンバランスがある。過剰適応と自己中心的な心性には共通して，内的適応と外的適応との関係性がバランスを保っていないという観点（伊藤，1997；桑山，2003）を指摘することができる。

内的適応の中でも，自己についての適応を理解する代表的な概念である自尊心の研究では，外的適応とのアンバランスな関係性を検討した知見が確認できる。自尊心とは自己の全般的な価値の感覚を指す概念であり，適応を示す従属変数として多くの研究で用いられている。一般に自尊心が高いことは良好な適応といわれており，人間関係での適応も良好だと思われている。しかし，そのような一般的な立場には矛盾した知見も多く，欧米では自尊心が高くても不健康な者が存在するという立場がある（Baumeister, Campbell, Kruerger & Vohs, 2003; Salmivalli, 2001）。その立場では，自尊心と適応とは直線的に結びつくものではなく，高い自尊心を持つ者の中には，適応的な者とは別に，攻撃的な特徴をもつ者がいると指摘されている。本邦でも，中学

1）本論文の一部は日本心理学会第70大会において発表された。

生のいじめ研究で，加害者であると自己報告した者は自尊心が高いという報告（本間，2003）や，反社会的な憧れを持つ中学生の自尊心は高いと指摘されている（楡木，2005）。このように高い自尊心には適応的な者とは区別される，不適応的な特徴をもった者が混在している。そのような中で，井上（1986）は児童を対象に，自尊心と教師の行動評価を組み合わせて，高い自尊心だが教師の評価が低い者を抽出し，その心性について劣等感の補償・否認によって防衛的に高い自尊心を身につけていると述べている。さらに井上（1986）は，自尊心は低いが教師の評価は良い者も抽出し，建設的で要求水準が高い者であると，その心性について説明している。従来，自尊心が低い者は不適応であると考えられることが多いが，自尊心が低い者の中にも適応上の特徴が異なる者が混在しているのである。

上記のような知見から，自尊心，つまり自己の適応が良くても，その外的適応は良くない者，加えて，外的適応が良くても自尊心が低い者がいることが分かる。これは広い意味で，内外適応がアンバランスな状態にある者を検討した知見だといえる。しかし，このような内外適応がアンバランスな状態像についての研究はいまだ少なく，その詳細は明らかにされていない部分が多い。彼らがどのような適応上の特徴をもっているのか，そして内外適応のバランスの良い者とは，どのように異なっているのかといった基本的な特徴を明らかにすることは，特異な思春期心性の理解にとって意義があるといえる。

鈴木（2005）では内外適応のアンバランスな状態を検討するために，自尊心と被受容感による類型を行っている。被受容感とは，思春期の適応理解に重要で他者の中にあっての純粋な安心感に近いような概念（杉山，2002；杉山・内田，2004）であり，人間関係での全般的な適応感を指すものである。鈴木（2005）の研究は，自尊心と被受容感を組み合わせることによって，個人内における自己と人間関係との全般的な適応感のバランスをとらえようとするものである。そこではまず自尊心と被受容感がともに高い，あるいは低い群を設定した（以降では前者をHH群，後者をLL群と表記する。2つ並んだ英字は，左側が自尊心の水準，右側が被受容感の水準を示す。水準はH＝高い，M＝中程度，L＝低い，ことを示す）。さらに自己と人間関係の関係性がアンバランスな状態を抽出するために，自尊心が高いが被受容感は低い群（HL群）と，被受容感は高いが自尊心は低い群（LH群）を設けた。最後に自尊心と被受容感がともに中間に布置する群（MM群）がある。これら5群とストレス反応，本来感（自分らしさの感覚を指す）との関連を検討した結果，自己と人間関係での適応感がアンバランスなHL群とLH群は，バランスが良いHH群ほど自分らしさを感じることができておらず，さらにLH群ではストレスが高いことが明らかとなった。だが，HL群とLH群の自分らしさの感覚はLL群よりは高いものであり，総じてHL群とLH群に，それぞれに異なる適応上の特徴が見られることが示唆された。

これに続いて，本研究では上記5群の適応上の特徴をさらに検討し，個人の内的枠組みの中で内外適応がアンバランスになっている者についての理解を深めることが大きな目的である。

より具体的には，行動面との関連を検討する。思春期の行動面の測定では，社会的スキルが広く採用されている。社会的スキルは思春期の不登校などの問題行動の改善にとって重要とされる概念である（曽山・谷口・本間，2000）。概して，中学生において適切な社会的スキルを身につけていることは良好な適応に関連しているといわれている（小松原，2005）。これに従えば，自尊心が高い，被受容感が高いといった者は，社会的スキルもまた適切に身につけている可能性が高いということになる。

では自尊心だけが高い，あるいは被受容感だけが高いといった，自己と人間関係との適応感がアンバランスになっている者はどのような社会的スキルを特徴とするのだろうか。内外適応がアンバランスになっていると，その行動面にも特徴が見られるといわれている（北村，1965）。自己の適応を過度に優先させて人間関係での適応を犠牲にする者は「積極的適応」と呼ばれる，攻撃的な行動傾向を見せるとされている。また逆に，人間関係での適応を過度に優先しすぎて自己の適応を犠牲にする者は「消極的適応」と呼ばれ，人間関係での直面化を回避し自分に閉じこもろうとする傾向にあると述べられている。後者のような過剰適応的な心性の者は，その行動傾向として他者追従で向社会的であろうと努めることが知られている（伊藤，1997：北村，1965）。つまり，HL群では不適切な社会的スキル，一方のLH群では適切な社会的スキルが高いことが推測されるだろう。

また，社会的スキルは自記式質問紙だけではなく，観察や他者評価によっても測定される。質問紙法によって測定された社会的スキルの自己認知は，教師評価などの他者評価とは一致しないことがある（平賀，2003）と指摘されている。また特に，教師から見れば自己中心的で対応に困る生徒でも，本人にはそうした自覚はないことが多く，逆に利他的に見える生徒ほど本人も同じように自分は利他的だと

自覚している傾向（大前，1998）が確認されている。一概に社会的スキルを身につけていると言っても，その自己認知と他者認知では，行動上の異なる側面をそれぞれが測定しているといえる。したがって自己認知と他者認知のズレを見ることによって，自己と人間関係での適応がアンバランスになっている者では，どのような行動の特徴をもっているのかがより詳細に検討でき，教育現場にとっても意義ある知見が得られると考えられる。

以上まとめると，自尊心と被受容感とを組み合わせた5類型を設定することによって，自己と人間関係との関係性がアンバランスな状態について，その適応上の特徴，特にその行動面を理解することが本研究の目的である。具体的には5群と社会的スキルの自己認知・教師認知との関連をそれぞれ検討することで，5類型の特徴をさらに明らかにしたい。

仮説は以下の通りである。

1．HH群は，自己認知の社会的スキルは適応的で，教師認知でも適応的な印象だろう。
2．HL群は，自己認知の社会的スキルは不適応的で，教師認知でも不適応，特に攻撃的な印象だろう。
3．LH群は，自己認知の社会的スキルは適応的で，教師認知でも適応的，特に向社会的な印象だろう。
4．LL群は，自己認知の社会的スキルは不適応的で，教師認知でも不適応的な印象だろう。

方　法

調査対象者

関東圏の公立中学校2校の1～3年生を調査対象とした。分析対象は回答に不備のあった者を除いた528名だった。男子は270名（平均年齢＝13.54，*SD*＝.94），女子は257名（平均年齢＝13.52，*SD*＝.89），性別不明が1名だった。中学校ごとの内訳は，A校の3年生1クラス27名，B校については全校生徒に調査を行い，1年生7クラス183名，2年生7クラス173名，3年生7クラス145名だった。

調査手続き

A校は2005年7月，B校は同年10月に質問紙調査を行った。質問紙，実施方法の説明を学校に郵送し，担任教師によってクラスごとに実施した。

調査内容

1．自尊心尺度と被受容感尺度

独立変数については，鈴木（2005）で作成した自尊心尺度と被受容感尺度を用いた。自尊心尺度は自己の研究領域で類似した操作的な概念，それに伴う尺度が多く存在する。研究によって定義や尺度項目がさまざまであり，自己受容などとの類縁概念との異同は必ずしも明確ではない。そこで自尊心の尺度項目の内容について精選を行って作成したものである。被受容感についても孤独感などの類縁概念の研究には類似する尺度項目が多く，自尊心と同様に項目内容の精選を行った。

自尊心も被受容感も7項目からなり，双方とも「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法。

2．社会的スキル尺度

先行研究（沖・藤生，2003；戸ヶ崎・岡安・坂野，1997；柳瀬，1999）の項目内容を検討して独自に作成した。向社会的行動9項目，攻撃的行動8項目，引っ込み思案行動6項目，主張的行動5項目の4因子構造を想定した。「ぜんぜんない」「あまりない」「ときどきある」「よくある」の4件法。

社会的スキル尺度は攻撃的・向社会的・引っ込み思案の3種類の行動傾向で構成されることが多いようである。近年では思春期の人間関係にとって主張的行動も重要だ（柴橋，1998）との見解があり，本研究では主張的行動の項目を含めた4種類の行動傾向で社会スキルを捉えることとした。

3．教師による行動傾向の評価

生徒の行動傾向について担任教師が評価を行った。生徒による自己回答と同様の4種類の行動傾向について，それぞれの定義を教示した上でクラスの生徒について評定を求めた。ひとりの生徒に対してその行動傾向を「該当する」「該当しない」の2件法で，複数回答可で依頼した。またいずれの特徴も該当しない場合は全て空欄でもよい旨を重ねて教示した。行動傾向の定義は大前（1998）と坂西（1994）を参考にして独自に作成した。それぞれの定義は，向社会的行動で「思いやりが強く，他者のためになるよう気遣い，配慮したり，周囲との調和を考慮する言動」，攻撃的行動で「思いやりが薄く，自分の利益を優先しがちで，周囲との調和を考慮しない言動」，引っ込み思案行動で「自分を人前に出さずに，何事に対しても消極的な言動」，主張的行動は「自分も他者も尊重して言いたいことを表現し，自らに責任を持った言動」とした。

結　果

自尊心，被受容感，社会的スキルの尺度分析

自尊心尺度7項目に対して逆転項目を処理した上で主成分分析を行った。その結果から他の項目と比

べて負荷量が.37と低かった質問項目「もう少し自分を尊敬できたらいいなと思う」を除き，再度同様の方法で主成分分析を行った（Table 1）。結果から第1成分は全て同方向で負荷量も.40以上の質問項目からなり，単因子としてのまとまりのよいことが確認された。信頼性を検討したところ，α =.86と十分な内的整合性も確認された。以上より6項目をもって尺度を構成した。

被受容感尺度7項目についても主成分分析を行った（Table 2）。結果から第1成分に全て同方向で負荷量も.40以上の質問項目からなり，単因子としてのまとまりのよいことが確認された。信頼性の検討についても，α =.90と十分な内的整合性が確認された。

社会的スキル尺度については，主因子法，バリマックス回転による因子分析を行った。その結果から負荷量が.35を下回る，あるいは複数の因子に重複して同程度に負荷していた質問項目「人に声をかけるとき，相手が嫌がらないような呼び方をする」（向社会的行動の候補），「約束を守らない人に対して，「これからは約束を守ってほしい」と怒らずに言う」と「図書館の中などで大きな声で話している人がいたら，「静かにして」と腹を立てずに言う」（ともに主張的行動の候補）を除き，再度同様の方法で因子分析を行った（Table 3）。結果，想定した内容としてまとまりのよい4因子構造が確認された。各因子の信頼性を検討したところ，第1因子「攻撃的行動」でα =.80，第2因子「向社会的行動」でα =.80，第3因子「引っ込み思案行動」でα =.77，第4因子「主張的行動」でα =.63であった。

「主張的行動」はα係数が十分な値とはいえず，さらに因子として想定した項目の半数近くが統計的に十分な基準を満たさなかったので削除した。他の因子と異なり主張的行動は場面想定の文意を含んでいる。今回用意した場面が必ずしも一般的に多く遭遇する場面ではなかった可能性は否定できない。主張的行動因子についてはこのような不備な点もあるが，最終的に因子として採用された項目の内容が使用できないほど奇異な場面ではないと判断し，分析に用いることにした。

上記全ての尺度については，素点合計を尺度項目数で除した，項目得点をもって以後の分析に用いた。したがってそれぞれの得点範囲は，自尊心尺度と被受容感尺度で1～5点，社会的スキル尺度の各因子で1～4点であった。

Table 1　自尊心尺度の主成分分析

質問項目	負荷量
私はだいたいにおいて現在の自分が好きです	.835
私は自分にだいたいは満足しています	.829
私は現在の自分に満足しています	.802
私は生まれてきてよかったなと思う	.781
私は生きていてよかったなと思う	.757
私は自分に対して肯定的です	.641
固有値	3.62
寄与率	60.33

Table 2　被受容感尺度の主成分分析

質問項目	負荷量
私は周りから受け入れられていると思う	.850
私は周りから大切にされていると思う	.837
私は人とつながっていると思えている	.818
みんなあたたかい心で私をむかえいれてくれるように思う	.809
私は周りから理解されていると思う	.795
私は優しい人に囲まれて1人ではないと思う	.759
私の考えや感じを何人かの人は分かってくれると思う	.739
固有値	4.50
寄与率	64.28

自尊心，被受容感，社会的スキルの特徴とその関連

自尊心尺度，被受容感尺度，社会的スキル尺度の各因子について，平均値と標準偏差およびそれら変数間でPearsonの積率相関係数を求めた（Table 4）。

自尊心と被受容感には強い正の相関が認められた。自尊心と社会的スキル4因子との間では弱い相関しか見られなかった。被受容感と社会的スキル4

2）一般的に心理学における分析方法では強い相関関係にある2変数を用いて類型を設定してはならないという慣例があるように思われる。しかし本研究では，特異な思春期心性の者をHL・LH群として実態に即して抽出することが目的である。したがって，「r =.65」という強い相関関係にある自尊心と被受容感を組み合わせる分析方法は，その結果で抽出されるHL・LH群の人数比も少なくなっていることからも，実社会の現状を反映した妥当な方法だと考えている。
また分類基準を標準偏差ではなく得点の絶対値とした。標準偏差による分類は調査ごとの分布の影響を受けるため，複数の調査間で各群の同質性が保たれない。筆者らは分類・群分けは絶対値によって行うほうが，複数の調査間での各群の同質性が保証されると考えている。

因子との間では，攻撃的行動と主張的行動とは弱い相関関係しか見られなかったが，引っ込み思案行動とは中程度の負の相関，向社会的行動とは中程度の正の相関が認められた。

群分けの設定[2)]

自尊心，被受容感ともに項目得点を用い，次のように分類した（鈴木，2005）。まず双方とも「高・中・低（それぞれ順にH・M・Lと表記する）」による3分割を行った。5件法で全て「あてはまる」に相当する項目得点4.0以上を「高H」，3.0〜3.9を「中M」，2.9以下を「低L」とした。次に双方の3分割で得られた分類同士を掛け合わせ，9分類を暫定的に抽出した。その中でもどちらかに「中M」を含む「ML/LM/HM/MH」の4分類については自尊心と被受容感のズレを算出し，1項目分を超える（項目得点1.0以上）ものは偏りが大きいと判断し，「HL」か「LH」のいずれかに含めた。例えば，「ML」でズレが1.0以上であった場合，より自尊心に優位に偏っていると見なして「HL」に含めた。そしてズレが1項目分に満たないものは全て「MM」に含めた。以上より「HH/LL/MM/HL/LH」の5つの群を設定した。

Table 3　社会的スキル尺度の因子分析結果

質問項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	共通性
第1因子　攻撃的行動					
からかって，人を傷つけることがある	.812	−.038	−.042	−.008	.662
つい人が嫌がることを言ってしまう	.759	−.073	.048	−.033	.584
人に嫌がらせをして，怒らせてしまうことがある	.700	−.045	.058	−.086	.503
人に乱暴な話し方をする	.626	−.003	−.058	−.009	.396
なんでも人のせいにする	.543	−.027	−.024	−.207	.339
自分のしてほしいことをむりやり人にさせる	.529	−.119	.112	−.047	.309
まちがいをしてもすなおにあやまらない	.470	−.137	.074	−.095	.255
他の人が間違ったり失敗したときは，はやしたてる	.365	−.114	.035	−.025	.148
第2因子　向社会的行動					
人が落ち込んでいるときには励ましてあげる	−.143	.725	−.170	.082	.582
「何か手伝おうか」と声をかける	−.080	.674	−.163	.048	.489
傷ついた人を助けてあげる	−.165	.655	−.107	.096	.477
誰かがうまくいったとき，うれしくなる	−.104	.572	−.164	.087	.373
人に「すごいね」という	−.038	.567	−.118	−.029	.337
自分が持っているものを人に分けてあげる	−.008	.447	−.072	.122	.220
他人の持ち物を自分のものと同じように大事にする	−.304	.394	−.018	.061	.252
人の話をおもしろそうに聞く	−.006	.352	−.298	.104	.224
第3因子　引っ込み思案行動					
みんなの話に気軽に加わる*	−.034	−.287	.712	−.081	.598
気軽に人に話しかける*	−.084	−.256	.689	−.117	.562
遊んでいる人の中に入れない	.138	.038	.645	−.149	.459
自分から人の仲間に入っていく*	−.125	−.238	.632	−.004	.472
休み時間に友達とおしゃべりをしない	.109	−.142	.512	.009	.294
悩み事を友達に相談できない	.102	−.047	.354	−.150	.160
第4因子　主張的行動					
いつも冷静な気持ちで，自分の意見を言える	−.161	.125	−.109	.712	.560
自分のいいたい事はいつも落ち着いて言う	−.118	.088	−.146	.552	.348
人があなたとは違う意見を言ったとき，相手の意見も聞くが，自分の意見もきちんと言う	−.069	.323	−.207	.407	.317
固有値	3.31	2.94	2.49	1.16	
累積寄与率	13.25	25.05	35.02	39.67	

a）＊のついている項目は逆転項目であり得点を反転してある。

Table 4　各尺度の記述統計とそれらの相関係数

	被受容感	向社会的行動	攻撃的行動	引っ込み思案行動	主張的行動	平均値	標準偏差
自尊心	.65**	.22**	−.14**	−.33**	.24**	3.37	.78
被受容感		.44**	−.28**	−.54**	.39**	3.53	.73
向社会的行動			−.26**	−.36**	.33**	3.00	.53
攻撃的行動				.09*	−.24**	2.15	.55
引っ込み思案行動					−.37**	2.35	.58
主張的行動						2.70	.61

a)　**: $p<.01$, *: $p<.05$

Table 5　5群による社会的スキルの分散分析と多重比較

	HH (N=84)	HL (N=17)	MM (N=322)	LH (N=43)	LL (N=62)	F値	多重比較
向社会的	3.21(.47)	2.67(.84)	3.00(.47)	3.31(.45)	2.61(.57)	18.98***	HH>HL·LL*** HH>MM** MM>HL† MM>LL*** LH>HL*** LH>MM** LH>LL***
攻撃的	1.92(.57)	2.46(.62)	2.18(.50)	1.87(.56)	2.38(.59)	11.52***	LL·MM>HH*** HL>HH** MM>LL† HL·LL·MM>LH***
引っ込み思案	1.98(.49)	2.81(.61)	2.35(.48)	2.13(.60)	2.88(.64)	31.60***	LL·HL·MM>HH*** LL·HL>LH*** MM>LH† HL>MM** LL>MM***
主張的	3.03(.54)	2.56(.68)	2.66(.56)	2.93(.65)	2.37(.68)	14.14***	HH>MM·LL*** HH>HL* LH>MM* MM>LL** LH>LL***

a) ***: $p<.001$, **: $p<.01$, *: $p<.05$, †: $p<.10$

5群と社会的スキルとの関連

自尊心と被受容感を組み合わせた5群を独立変数とし，社会的スキルの各因子をそれぞれ従属変数とした1要因分散分析を行った。その結果，全ての従属変数において群間で有意な差が認められた。そこでTukeyのHSD法による多重比較を行った。多重比較の結果もTable 5に示した。

その結果，攻撃的行動と引っ込み思案行動はHL群とLL群で高く，HH群とLH群で低く，それら中間にMM群があるということが示された。また向社会的行動と主張的行動ではHH群とLH群で高く，HL群とLL群で低く，MM群がその中間にあるということが示された。概して，適切な社会的スキルはHH群とLH群で高く，不適切な社会的スキルがHL群とLL群で高い傾向にあることが示された。

5群と教師による行動傾向の評価との関連

自尊心と被受容感を組み合わせた5群における，教師による行動傾向の評価の有無についてその出現頻度を検討した（Table 6）。まず教師による行動傾向の評価は複数回答可としたため，例えば「攻撃的で引っ込み思案にも該当」など，ひとりの生徒についていくつかの行動傾向が該当するというタイプが確認された。行動傾向の該当の有無は2通り，これが4種類の行動傾向で評価されたため，計算上は16通りのタイプが出現可能であった。確認したところ，実際には11通りのタイプだけが見られた。存在しなかったタイプは「向社会的・攻撃的」，「向社会的・攻撃的・主張的」，「向社会的・主張的・引っ込み思案」，「攻撃的・主張的・引っ込み思案」「向社会的・攻撃的・主張的・引っ込み思案（全てに該当）」に該当すると評定される5通りのタイプだった。向社会的と攻撃的という正反対の評価がひとりの生徒に重なって印象づけられることは現実的にも妥当ではないため，11タイプに限定されたと思われる。

考　察

自尊心と被受容感による5群と社会的スキルとの関連

5群と社会的スキルの自己認知との関連を検討した結果，以下のような特徴が各群で明らかとなった。

HH群とLH群では「向社会的」「主張的」な社会的スキルの認知が高く，「攻撃的」「引っ込み思案」の社会的スキルの認知が低い傾向が認められた。HH群とLH群は，社会的スキルの自己認知という

Table 6　5群における教員の行動評価のタイプについての人数と割合

	引・主	向・攻・引	向・引	攻・引	向・主	引のみ	攻・主	主のみ	向のみ	攻のみ	該当なし	全体
HH	0	0	2(2.4%)	0	6(7.1%)	11(13.1%)	1(1.2%)	17(20.2%)	25(29.8%)	5(6.0%)	17(20.2%)	84(100%)
HL	0	0	0	0	0	2(11.8%)	0	5(29.4%)	5(29.4%)	2(11.8%)	3(17.6%)	17(100%)
MM	0	0	6(1.9%)	2(0.6%)	26(8.1%)	56(17.4%)	3(0.9%)	36(11.2%)	87(27.0%)	25(7.8%)	81(25.2%)	322(100%)
LH	0	1(2.3%)	1(2.3%)	0	8(18.6%)	5(11.6%)	0	3(7.0%)	12(27.9%)	12(27.9%)	8(18.6%)	43(100%)
LL	1(1.6%)	0	3(4.8%)	0	3(4.8%)	12(19.4%)	0	8(12.9%)	8(12.9%)	8(12.9%)	23(37.1%)	62(100%)
全体	1(0.2%)	1(0.2%)	12(2.3%)	2(0.4%)	43(8.1%)	86(16.3%)	4(0.8%)	69(13.1%)	137(25.9%)	41(7.8%)	132(25%)	528(100%)

a) 表中の「引」は「引っ込み思案行動」,「主」は「主張的行動」,「向」は「向社会的行動」,「攻」は「攻撃的行動」を示す。

点では同じ特徴をもっており，この群の者は自分の行動傾向が社会的に適切だと認識していることが分かった。

一方，LL群とHL群では，HH群とLH群とは正反対の結果が示された。つまり，LL群とHL群では「攻撃的」「引っ込み思案」な社会的スキルの認知が高く，「向社会的」「主張的」の社会的スキルの認知が低い傾向が認められた。LL群とHL群は社会的スキルの自己認知という点では同じ特徴をもっており，この群の者は自分の行動傾向が社会的に不適切だと認識していることが分かった。

社会的スキルの自己認知は本人が自分の行動をどのように認識しているかを測定したものであり，実際の現実的な行動を直接的に反映したものではない。LL群とHL群では「攻撃的」で「引っ込み思案」と自分の行動を認識しているが，本来，「攻撃的」とは他者に向かって積極的に働きかける行為を指し，「引っ込み思案」とは他者から離れて人間関係から逃避する行為を指している。これら両者が同時に行われることは，現実的には想定しがたいほどの両極端の行動傾向といえる。この点を踏まえて上記の結果を解釈すると，「向社会的」「攻撃的」など，社会的スキルの内容ではなく，よりおおまかに行動傾向が社会的に適切か不適切かという認識の違いがHH・LH群とLL・HL群には見られると考えることが妥当であろう。

総じて，人間関係での適応感である被受容感を得ている者（LH・HH）は自尊心に関係なく，適切な社会的スキルが身についていると認識しており，被受容感を十分に感じていない者（LL・HL）は自尊心に関係なく，社会的スキルが不適切だと認識していることが示された。この結果は，孤独感が低い中学生は適応的な社会的スキルを認識しているという先行の知見（金山・小野・大橋・辻本・大井・松井・辻本・吉田，2003），及び本研究の仮説を支持したものといえる。

自尊心と被受容感による5群と教員の評価との関連

まず，教員の評価について，その全般的な傾向について述べておきたい。教員は生徒の4人に1人を「向社会的」だと評定していた（25.9%）。同じ割合で「該当なし」と評定される生徒も4人に1人にのぼった（25%）。次いで，「引っ込み思案」が16.3%，「主張的」が13.1%と続いていた。他の行動評価については10%を下回っていた。したがって，生徒の80.3%，つまりおよそ5人に4人は，「攻撃的」以外の3つの行動傾向である「向社会的」「引っ込み思案」「主張的」のいずれか，または行動的には特別な印象のない「該当なし」として見られていることが明らかとなった。総じて，教員は生徒に対しては，思いやりのある生徒と見ることが最も多く，自己中心的で他者を配慮しない生徒だと見ることは少ないことが分かった。

以上を踏まえて，各群の教員評定の特徴を考察する。

まずHH群とHL群は同じ特徴を示し，「向社会的」か「主張的」と評定されることが多いといえる。教員が全般的に生徒を「向社会的」と評定しやすい傾向（およそ30%）を考慮すれば，全体的傾向の13.1%と比較して，ともにおよそ20～30%という大きな割合で「主張的」と評価されていることがHH群とHL群の特徴だと解釈できる。

LL群の特徴は「該当なし」の評定の割合が大きいことである。全般的傾向では25%である「該当なし」の割合が，LL群では37.1%と高い。さらに「引っ込み思案」も他の群に比較して評定されやすいようである。教員からの印象が薄くおとなしい生徒というのがLL群の特徴と解釈できるだろう。

興味深いと考えられるのがLH群の特徴である。全般的傾向では評定される割合の低い「攻撃的」行動の評定が，LH群では他の群と比較して高いことが明らかとなった。全般的傾向では7.8%の生徒しか教員から「攻撃的」と評定されないにもかかわらず，LH群では27.9%，およそ3人に1人の生徒が評定されており，他者への配慮がなく自己中心的な

生徒と印象を持たれやすい傾向がLH群の特徴と解釈できるだろう。

以上，HL群とLH群では仮説と結果が正反対であった。他の群については仮説通りであった。

総合的考察

HH群の行動特徴は，自己認知・教員評価ともに健康的といえるだろう。自尊心と被受容感をともに十分に感じられている，バランスの良好な状態が適応的な行動を導くことは当然の結果といえるだろう。

一方でHL群・LH群・LL群における，不適応の特徴は一様ではない。

LH群は行動面で自己認知と教員評定が不一致を起こしている。自分では適切だと認識している行動傾向も，教師から見れば他者への配慮がなく自己中心的だという印象を持たれやすくなっている。大前（1998）が指摘した，本人に自己中心的だという自覚のない生徒の像が合致される。このようなLH群の特徴はどのように解釈されうるだろうか。ここでHorney（1945　我妻・佐々木訳，1981）の人格理論が参考になる。環境への基本的不安に対処する態度という文脈で，神経症的な不適応の態度について論じたHorneyによれば，その態度には「攻撃的・他者追従・離反」の3種類の型が想定できるといわれている。この中でもLH群は他者追従型と類似する特徴を持っているように思える。他者追従型は，自身が必要とされたい欲求にあがき，他者に受容されるように自己犠牲的なまでに向社会的な行動を意識的に重んじている。だが，そのような自己犠牲の中で自分が認められないときには，怒りを爆発させる傾向も他者追従型の特徴といわれている。自己犠牲的で偽りの自己で生きるという点では過剰適応の心性（高田，1999）にも共通点が多い。そして，過剰適応にしても他者追従型にしても，自己肯定の低さは共通した特徴として考察されている。このように見ると，LH群は自己否定のつらさを埋めるように，他者からの受容を過度に優先して外的適応を図っているがゆえに，ときに爆発的に怒りを出してしまう姿は教員から自己中心的だと見られると推測できよう。そのようなLH群は抱えるストレスも高く（鈴木，2005），心理的援助の必要性が考慮される群だろう。

LL群は一貫して不適応的な特徴をもっている。ストレスは高く，自分らしさの感覚も乏しい（鈴木，2005）。そして行動面では自分は不適切だと認識している。教員からも目立たない印象で，まさに離反型の特徴に類似している。いわゆる「暗くおとなしい」子に見える彼らは，真に孤立して自分を見失い，人間関係での要求に何らの対策も講じずに打ちのめされている「無適応」（北村，1965）のような状態にあると推測される。早急な心理的援助が望まれる。

HL群は教員から主張的な行動だと肯定的に評価されているにもかかわらず，自分では行動傾向を否定的にとらえている。彼らは人間関係での受容感を十分に得られずにいるが，自己を肯定する感覚は高い。彼らには人間関係での不適応に向き合えていないという点が見える。向き合えているならば，人間関係での不適応が自尊心を低下させ，必然的に自己を肯定的に高く保つということは難しくなるからである。このような「人間関係の乏しさから自分の世界に居直る」（榎本，2001）といった特徴は自己中心的な者の心性に近いといえる。だがHL群を自己中心的な心性の者とは断定できない。教員の評価が肯定的であり，攻撃的で自己中心的な評価は受けていないからである。Horneyのいう攻撃型の理論で推察するならば，社会的評価を獲得している自己中心的な者ということになるだろうか。攻撃型の者は人間関係を犠牲にしてまで自身の力・権利を獲得することを欲する。したがって成人では社会的な名声や成功を得ることも多い。中学生であるHL群が受ける「主張的」という教員からの評価が，成人の社会的名声と同じと解釈することはできないが，社会的評価という点で，教師から見て良い生徒であろうと努めている可能性はあるかもしれない。HL群についてはさらに適応上の特徴を検討して，彼らの現実的な姿をより明確にする必要がある。

以上より，HH群が良好な適応像であり，他のHL・LH・LL群がそれぞれに異なる不適応の特徴をもった心性だということが示されたといえる。特にLL群に比べ，HL群とLH群では自己認知と教員評定が不一致を起こしており，自尊心と被受容感との関係性がアンバランスになっている者は，同じ不適応といっても，より複雑な適応の様相が想定される。彼らへの心理的援助のためにも，今後，心理力動や無意識過程をも含めて，その複雑な心理的な過程を明らかにすることが必要と考えられる。

引用文献

Baumeister, R, F., Campbell, J, D., Krueger, J, I. & Vohs, K, D. (2003). Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles? *Psychological Science in the Public Interest*, 4,

1-44.
榎本博明（2001）.「自己チューな子」の心理と行動　児童心理，**55**，1601-1610.
平賀明子（2003）. 社会的スキル「自己報告尺度」に関する妥当性の検討－仲間からの評定と自己評定との関連　北星学園大学短期大学部北星論集，**1**，57-69.
本間友巳（2003）. 中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応　教育心理学研究，**51**，390-400.
Horney, K. (1945). *Our Inner Conflict: A constructive theory of neurosis*. New York: W.W. Norton.（ホーナイK. 我妻　洋・佐々木譲（訳）（1981）. 心の葛藤　誠信書房）
井上信子（1986）. 児童の自尊心と失敗課題の対処との関連　教育心理学研究，**34**，10-19.
伊藤美奈子（1997）. 個人志向性・社会志向性から見た人格形成に関する一研究　北大路書房
金山元春・小野昌彦・大橋　勉・辻本雄一・大井閑代・松井賀洋子・辻本育宏・吉田初子（2003）. 中学生の社会的スキルと孤独感　広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　教育人間科学関連領域，**51**，289-295.
北村晴朗（1965）. 適応の心理　誠信書房
桑山久仁子（2003）. 外界への過剰適応に関する一考察：欲求不満場面における感情表現の仕方を手がかりにして　京都大学大学院教育学研究科紀要，**49**，481-493.
小松原裕輔（2005）. 日本における社会的スキル研究の概観－社会的スキルと適応，SSTに関する研究報告の縦断的なまとめ－　法政大学大学院臨床心理相談室　報告紀要，**2**，31-39.
楡木佳子（2005）. 反社会的憧れを抱く中学生の帰属スタイルと自尊感情　犯罪心理学研究，**43**，17-35.
沖　郁子・藤生英行（2003）. 中学生の社会的スキルと学級適応感との関係　教育相談研究，**41**，39-48.
大前泰彦（1998）. 教師によるアサーション評定と中学生の学校適応感との関連　心理臨床学研究，**16**，88-92.
坂西友秀（1994）. 教師の利己的生徒，利他的生徒についての認知と生徒の自己認知　教育心理学研究，**42**，403-414.
Salmivalli, C. (2001). Feeling good about oneself, being bad to others? Remarks on self-esteem, hostility, and aggressive behavior. *Aggression and Violent Behavior*, **6**, 375-393.
柴橋祐子（1998）. 思春期の友人関係におけるアサーション能力育成の意義と主張性尺度研究の課題について　カウンセリング研究，**31**，19-26.
曽山和彦・谷口　清・本間恵美子（2000）. 不登校生徒のストレスマネジメント：社会的スキルとself-esteemの視点から　秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，**22**，61-70.
杉山　崇（2002）. 抑うつにおける「被受容感」の効果とそのモデル化の研究　心理臨床学研究，**19**，589-597.
杉山　崇・内田宏明（2004）. 学校カウンセリングにおける機能的な心理－福祉アプローチについて　ある中学生の被受容感へのアプローチと現実的アプローチの論考　長野大学紀要，**26**，41-48.
鈴木真吾（2005）. 自尊心と被受容感からみた思春期の適応理解－ストレス反応・本来感との関連－日本パーソナリティ心理学会第14回大会発表論文集，107-108.
高田夏子（1999）. いい子の悩み－過剰適応について　鍋田恭孝（編）　こころの科学87　学校不適応とひきこもり　日本評論社　Pp72-75.
戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・坂野雄二（1997）. 中学生の社会的スキルと学校ストレスとの関係　健康心理学研究，**10**，23-32.
柳瀬かおり（1999）. 思春期の友人関係に関する一考察－子どもの対人不安とアサーション及び攻撃性との関係　聖心女子大学大学院論集，**21**，76-104.

（受稿3月23日：受理4月27日）